



わくわくがいっぱいの遊びは学びの宝石箱

園長 川嶋 佳恵

10月半ば頃よりぐっと気温が下がり、園庭の木々も色付き始め、金木犀の香りや澄んだ空気に秋の深まりを感じる季節になりました。高円寺北子供園は自然環境に恵まれた素晴らしい園です。これからの季節は様々な木々の落ち葉が降り注ぎ、あちらこちらが落ち葉で埋め尽くされます。そして敷地内の木々の果実が色づき、収穫の季節の到来です。先日は、年長児が収穫した柿をみんなで食べました。この後は、みかん、ざぼん、ゆず、キンカンなどなど…今から収穫することが楽しみです。秋の園庭はとても魅力的な遊び場になります。秋から冬の園生活も「わくわく」楽しいことがいっぱいですね。

さて、「わくわく」という言葉を聞いて、どのようなことをイメージしますか。日常生活の中で好きなことをして心が躍るような感情になること、趣味や新たな挑戦など何かに夢中になって取り組むこと、「面白い」「楽しい」という気持ちを実感したり、「もっとこうしたい」というような意欲がわくことなどでしょうか。このように「わくわく」しながら日常生活を送るということは、まさにそれぞれのウェルビーイング(精神的にも身体的にも社会的にも満たされ、自分自身が幸せと感じる状態)にもつながることなのではないかと考えます。本園の園内研究会講師として来ていただき、本園の教育・保育を支えていただいている聖心女子大学特命教授の河邊貴子先生が全国国立幼稚園・こども園長会発行の「幼児教育じほう」に寄稿されている文には、「わくわく」は「湧く湧く」であり、その語源は水などが地中から出てくるさまや、物事が急に表れるさまにある。コンコンと尽きることなく湧き出る泉の水は、一つにとどまることなく、常に新鮮で勢いがある。それが転じて、どんどん心の中から溢れてくる状態を表す言葉になった。となれば、「わくわく」するという感情は、私たちが主体者として生きていく上の原動力のようなものだといえる。そして、子どもたちが、わくわくを遊ぶ姿においては、次々とやりたいことが湧き出て主体的に対象世界と向き合おうとすることそのものが大切なのではないかと記されています。普段、私たちは、なんとなく「わくわく」という言葉を使っていますが、とても奥深い、大人にとっても日常生活に活気を与える素敵な感情であり、子どもたちにとっては、遊びが充実するために不可欠な感情だと思うのです。

高円寺北子供園では、子どもたちが「わくわく」しながら遊ぶことの重要性に着目し、令和7年度・令和8年度杉並区教育課題研究指定園として、研究テーマ「わくわくが生まれる・つながる・広がる遊びを育てる指導や環境の工夫」のもと、教育研究を推進しています。研究というと堅苦しい、難しい、特別な感じがしますが、そうではなく、日常の教育・保育の中で、子どもたちが取り組む遊びの事例を取り、子どもたちが「わくわく」する気持ちを継続的に感じながら主体的に遊ぶことで、それぞれの遊びの楽しさや面白さ、探求心や仲間とのつながりが深まり、充実し、子どもたち自身でつかみ取る学びが多くある、つまり、「遊びは学び」ということを可視化して発信する取り組みの一つと捉えています。私たちは、「わくわく」が生まれ、つながり、広がったりすることを繰り返す遊びになるよう援助や環境構成の工夫を見出し、常に質の高い教育・保育を提供できるようにしていきたいと考えています。

前出の河邊氏によると遊びの中の「わくわく」には、「収束的わくわく」と「拡張的わくわく」があるといいます。「収束的わくわく」は、目の前の遊びや課題に集中し没頭する中で生まれるわくわくです。例えば、お寿司屋さんごっこで、回転すしを実現するためにお寿司を運ぶ台が回転する仕組みを試行錯誤したり、ドングリをイメージしたドングリ人形作りから、ドングリホテルごっこに発展し、その人形をエレベーターで2階、3階と上下に移動できるようにするために、思いを出し合いながら工夫して実現したりすることで感じる「わくわく」です。目指す目的が明確にあり、「こうかな?」「もっとこうしたい方がいいかも?」など試行錯誤する過程に面白さや楽しさ、喜びを感じる「わくわく」を言います。この「収束的わくわく」は、年齢が高くなるほど遊びの過程で多く出てきます。一方、「拡張的わくわく」は、ものや経験、一つの遊びをきっかけに想像が広がり、「もっとこうしたら楽しそう」「いいこと考えた!」と遊びのイメージが広がったり、一つの遊びが他の遊びや関わりへ発展したりするような「わくわく」です。うさぎ組で楽しんでいた海ごっこでは、海のイメージから魚釣りごっこ→「魚になって釣りたい」と自分が魚になって釣られる→たまたま海の近くににあった板積み木に乗ったらギットン、バットンと動いたことから→「サーフィンみたい」という思いが広がり→みんなでサーフィンごっこを楽しむ…のように遊びの世界が新たなアイデアや展開の中で「いいこと考えた」「面白そう」「やってみよう」等の心の動きによってもたらされる「わくわく」です。

私たちは、この「収束的なわくわく」と「拡張的なわくわく」が子どもたちの取り組む遊びの中でいくつもいくつも繰り返し出てくることで、遊びが継続し、遊びが充実すると考えています。そして、その「わくわく」は、常に保育者が提案するものではなく、あくまで子どもたち自身が遊びの中で自ら感じるのが大事なのです。また、一つの遊びが充実するためには、遊びの中で感じる「わくわく」は、単発的に起こるものではなく、遊びの芯となるテーマやイメージに関連しながら生まれ、つながっていくことが大事なのです。そのために、私たち保育者はどのような言葉をかけ、子どもたちの「わくわく」をどのように支えていく必要があるのか、前日の遊びの取り組みの様子から、次の日の保育室の環境設定や教材準備はどうしておくのか、日々試行錯誤しながらそれぞれの子どもたちにとっての最適援助・指導を探っています。子どもたちの意欲や興味・関心の動力となる遊びの中の「わくわく」が繰り返され、それに伴う保育者の援助や指導がマッチした時には、その遊びは盛り上がり、人とのつながりが深まり、幼児自身が満足感や充実感を感じる経験となるのです。そして、このような「わくわく」が繰り返される遊びを通して気が付く多くの学びがあり、幼児期に身に付けるべく人格形成の基礎となる力が身に付いているということになります。

まだまだ研究半ばではありますが、これからも子どもたちから湧き出てくる「わくわく」に寄り添い、私たち保育者も「わくわく」しながら質の高い教育・保育のために尽力してまいります。



《今月の指導》

★3歳児 うさぎ組

運動会を終え、くま組やぞう組が運動会でしていたことを教えてもらったり、まねたりしながら繰り返し体を動かすことが楽しくなっています。

また、散歩先で見付けた落ち葉や木の実を拾って集めるなど、秋の自然に触れて遊ぶ姿も見られます。季節の変化を感じたり、見付けた自然物を使って遊んだりしながら秋を十分に感じて楽しめるようにしていきます。

今月は、次のことを重点に指導していきます。

- 秋の自然物で遊んだり、体を動かしたりしながら自分の好きな遊びを繰り返し楽しむ。
- みんなと一緒にする中で一緒に体を動かしたり、触れ合ったりする楽しさを感じる。
- 手洗いうがいなど園生活に必要なことが少しずつ分かり自分から行おうとする。

11月から全員保育の時間が長くなるため、子どもたちの様子に応じて活動内容を考えながら、無理なく楽しく過ごしていけるようにします。

★4歳児 くま組

くま組の子どもたちは運動会を経て、友達と体を動かして遊ぶことが更に楽しくなってきました。リズムを教えたり教えてもらったりして他学年とも一緒に踊ることや、友達と誘い合ってリレーごっこを楽しんでいます。友達と一緒に過ごす嬉しさを感じている姿が増えてきています。また、散歩や遠足を通して、秋の自然を感じながら自然物を遊びに取り入れて楽しむ様子もあります。

今月は、次のことを重点に指導していきます。

- 自分の思いを表現しながら、保育者や友達と関わって遊ぶことを楽しむ。
- イメージをもちながら、みんなで何かになりきって動くことを楽しむ。
- 季節の変化に合わせて、生活に必要なことを行おうとする。

遊びの中で、友達とのやり取りや、必要なものを作って使うことを楽しんだり、こども会に向けて何かになりきって表現する遊びも楽しんだりできるようにしていきます。

★5歳児 ぞう組

運動会を終え、友達とのつながりが深まってきました。友達を誘い合って鬼遊びなどのルールのある遊びをしたり、くま組と一緒にリレーをしたりして体を動かすことを繰り返し楽しんでいきます。

秋の自然にも触れ、たくさんのどんぐりの大きさや色を比べて気が付いたことを言葉にしたり、どんぐりを転がすコースをつくるなどの遊びに取り入れたりしています。

今月は、次のことを重点に指導していきます。

- めあてに向けて試行錯誤をしたり、挑戦したりする楽しさを感じる。
- お話の世界を楽しみながら、友達と考えを出し合いながら劇をつくっていく楽しさを感じる。
- 1日の生活に見通しをもち、友達と声を掛け合いながら生活を進める。

こども会に向けて、子どもたちと表現する楽しさを味わいながら、自分たちの劇をつくっていくことの楽しさを感じられるようにします。また、縄跳びやフラフープなど自分のできるようになりたいことに向けて挑戦して遊ぶことができるようにしていきます。